第１回　里山広葉樹プラットフォーム　設立準備協議会　開催概要

里山広葉樹の利活用と再生に向け、川上から川下までの広葉樹に関わる多様な主体が参画し、情報共有と課題解決、価値発信等を行うプラットフォーム「一般社団法人　里山広葉樹利活用・再生機構（仮称、通称:Satoco)」の設立を目指し、発起人による設立準備協議会を立ち上げた。

以下に、第１回設立準備協議会の開催概要を記載する。

開催日時：令和８年５月 29 日（金）10:00～12：00
開催方法：オンライン開催
参 加 者：発起人、林野庁広葉樹チーム（鈴木清史チーム長、有山隆史プラットフォーム担当、ほか有志職員）

概要：　会議次第・資料（別掲）に沿い、事務局（林野庁広葉樹チーム）から３点（①設立準備協議会の在り方、②団体設立に向けた事項（設立趣旨、運営体制、機能・メリット）、③今後のスケジュール）の説明を行い、発起人と意見交換を行った。

発起人からは、「炭や薪は食文化を支えている」「事業計画の具体化が不明確」「会員対象範囲の区分の仕方に工夫が必要」等の意見があった。今後の当面の予定（６月～９月）として、各ワーキンググループで団体の機能の具体的議論を進め、事業計画の具体化のほか、設立趣旨や会員区分等の見直しを行い、９月中に第２回設立準備協議会を開催することとなった。

国有林野部長挨拶、発起人からの発言の概要は、以下のとおり。

【長崎屋国有林野部長挨拶】

広葉樹の利活用および里山林の再生については、素材生産者の減少や安全確保、製材設備更新の困難、技能者不足、需要喚起の難しさなど、各段階で多くの課題が存在している。また、これらの課題がサプライチェーン全体で十分に共有されていない状況にある。

林野庁においては、有識者会議での議論を踏まえ、関係者間で情報を共有し、課題解決に取り組みながら、関係者が相互に利益を得られる仕組みとしてプラットフォームの立ち上げを企図し、本協議会の設立に至った。

本プラットフォームの基本的なビジョンとして、第一に、広葉樹の利活用および里山林の再生に関わる担い手を拡大すること。そのためには、国内における取組の認知向上についても併せて検討していく必要がある。

第二に、里山の再生については、従来の状態への回帰ではなく、環境変化等を踏まえた新しい里山の姿を構築していく必要がある。今後の取組においては、林学や生態分野の専門家に加え、他分野の参画も必要となる可能性がある。

本会議においては、協議会の運営に関する基本事項の確認を行うとともに、団体の設立趣旨、機能およびスケジュールについて方向性を固めていきたいので、よろしくお願いする。

【発起人からの発言（順不同）】

（1）株式会社小林三之助商店

本取組について、川上から川下までの情報を集約し、取りまとめていく仕組みが重要。
情報を整理し共有することで、川上・川中・川下それぞれが潤う形になる。

（2）朝日ウッドテック株式会社

国産材調達においては、森林、伐採、選別、市場、製材、乾燥の各工程で課題が存在。
説明内容に異論はなく、プラットフォームに期待している。

（3）空知単板工業株式会社

国産広葉樹が一般消費者に広く使用される状態になることを期待している。
自社でも山側の情報を得ながら活用方法を検討しているが、山から出てくる素材をどう活かすかという考え方が必要である、一方、情報が消費者に十分伝わっていない状況が課題としてある。
プラットフォームに相談すれば、国産広葉樹が手に入る、そのような会になればありがたい。

（4）藤島木材工業株式会社

川下において在庫前提・短納期の考え方が依然として多い状況。
分離発注や数か月～数年単位でのスケジュール対応を進めているが、十分な浸透には至っていない。
資源量の把握や伐採から納品までのリードタイムの共有、適正価格帯および付加価値向上に力を入れていきたい。

（5）株式会社佐合木材

バイオマス発電に関していえば、広葉樹は発熱量が高く需要がある一方で、その他の需要での認知度が高くないため、広葉樹の価値が定まっていない状況にあるという認識である。
例外として、薬木は需要が有り認知度も高いため、チップ加工の観点から何か協力していきたい。
プラットフォームでは、国産広葉樹の価値を確立し認知度の向上に取り組んでいただきたい。

（6）ノースジャパン素材流通協同組合

川上へ川下側の用途情報（特に伝統工芸、スポーツ用品、木工クラフト等）が伝わっていないことが課題。
情報が伝わっていないが故に、伐採された広葉樹が全てチップや薪として扱われる、それにもならないものは林地残材になり、一切活用されないといった現状がある。
川下が求める樹種・規格の情報を川上へ伝える仕組みが必要である。
国産広葉樹の情報流の復活に向け、経済産業省も巻き込んで取り組んでいただきたい。

（7）物林株式会社

会員区分の中で流通が川中事業者に限定されている点の再整理が必要ではないか。
プラットフォームで川下側のニーズを把握する仕組みを入れていただきたい。

（8）東京燃料林産株式会社
炭や薪は食や文化を支える役割を持つと認識している。
炭の生産者の場合、ナラ・カシ類やクヌギ類を主に利用し、それ以外の樹種はシイタケ原木かチップ、もしくは未利用となっている。こういった広葉樹を活用できる場があればよい。
プラットフォームについて、事業計画の具体化が不明確である。
また、広葉樹は（管理の）空白地域、放置林をどう対応するかという課題もあるので、どこかのワーキンググループにおいて検討するべきではないか。
会員区分について、一人親方のようないろんな仕事を同時にやっている方もいるため、川上・川中・川下ではなく、機能別の分類の考え方があってもいいのではないか。

（9）株式会社ディーエルディー
薪に関して、生産体制にばらつきがあり、規格や乾燥状態の差が課題。
また、原木価格の上昇により供給体制にも大きく影響。
プラットフォームにおいて、流通の課題に取り組んでいきたい。

（10）渡辺林産工業株式会社
伐採業者全体の減少、また、伐採業者のなかでも広葉樹を伐る業者が少ないことが課題。
山林所有者が自分の山を把握しておらず、有用な資源が活用されていない実態が多い。
きのこ生産業者においても、おが粉の価格上昇や後継者不足により廃業し、減少しているのが課題。
プラットフォームにおいて、山の情報や素材生産者情報の共有、業界の認知度向上といったことを取り組んでいただきたい。

（11）高谷林業株式会社
広葉樹の供給不足が課題。素材生産者の減少、担い手不足、高齢化、生産性の問題により、資源の供給が今後さらに厳しくなる可能性がある。
川下側でも原材料価格やエネルギーコストの上昇に対し、製品への価格転嫁が難しく、厳しい経営環境となっている。川上～川下全体で多層的な収益悪化が発生し始めている印象。個別分野ではなく、プラットフォームにおいて、川上～川下の幅広く連携できる仕組みづくりができること、広葉樹資源の持続的な循環利用と産業の維持・発展の両立つながることを期待している。

（12）森産業株式会社
きのこの広葉樹に関する課題について、素材生産者の担い手不足による原木の調達難、おが粉等の価格上昇、需要―供給の情報共有の不足がある。
プラットフォームにより、広葉樹に関する情報の分断が解消されることを期待している。

（13）ユキグニファクトリー株式会社

プラットフォームの趣旨に関して、広葉樹利用は、里山の獣害対策、地域の安全、里山の景観保持に繋がるといった広い視点も入れてはどうか。
構造的な課題も想定されるため、政策と現場をつなぐ機能があることをプラットフォームに期待する。
きのこ生産者全般の課題として、原料調達の不安定さ、コスト上昇、使用済み培地の処理が課題。

（14）有限会社なかのきのこ園
素材生産者の高齢化や後継者不足による担い手不足が課題。
椎茸原木の素材生産者は小規模事業者が多く、機械化の導入が難しい状況。

（15）カリモク家具株式会社
国産広葉樹の流通は、不安定さや様々な課題がある。
家具の業界は国内もグローバル的にもあまりよくはないが、素材の持つストーリーや付加価値を消費者に知っていただく、理解していただく流れができてきている。
国産広葉樹活用に関わる仲間を増やしていくことが大事であり、プラットフォームに期待したい。

（16）株式会社イトーキ
地元の木を使いたい消費者は非常に多いが、対応しきれない部分がある。プラットフォームを通じて、全国のサプライチェーンが広がってくれば、このようなニーズに対応できるようになる。
家具業界は、調達から製品化までのリードタイムが長いのがネック。この協議会・プラットフォームの中で対策について検討できればありがたい。

（17）株式会社日本政策投資銀行
プラットフォームの活動において、継続的に政策対話や政策提言ができるような役割があればよいので、設立趣旨で記載してはどうか。

（18）株式会社価値総合研究所
森林・林業の発展には川上側の課題が多いと認識。
森林所有者においては、資産価値認識の低さ、土地の所有権の分散といった点、素材生産者においては、担い手不足の点が課題である。
これらに対して有効な手立てに繋がるような政策提言や情報発信への貢献ができればと考える。